

4. 授業評価アンケート報告(前期・後期)

平成27年度においても、教員の教授法改善や授業に対する満足度の把握等を目的とした「授業評価アンケート」を実施した。各学科のアンケートの実施結果は以下のとおりである。

(1) 環境園芸学科

平成 27 年度前期・後期 授業評価アンケート 集計結果分析

アンケートの設問

学生の授業取り組みに関する質問

設問① 私はこの授業によく出席した

設問② 私は授業内容について質問や発言をした

設問③ 私はこの科目に積極的に取り組んだ（予習や復習をした）

教員の授業実施方法に関する質問

設問④ 教員の声は聞き取りやすかった

設問⑤ 教員の板書（または PPT・配付資料等）は読みやすかった（見やすかった）

設問⑥ 教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた

設問⑦ 教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた

設問⑧ 教員は熱意を持って授業をしていた

総合評価

設問⑨ 私はこの授業内容を理解できた

設問⑩ 私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役に立つと感じた

設問⑪ 私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた

表 1. 平成 27 年度前期の回答の集計

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値
	5	4	3	2	1		
①	579	243	127	41	2	992	4.37
②	110	145	444	106	184	989	2.89
③	206	284	363	75	61	989	3.50
④	491	282	164	36	17	990	4.21
⑤	465	271	185	53	18	992	4.12
⑥	646	227	99	14	4	990	4.51
⑦	502	307	145	27	11	992	4.27
⑧	608	254	113	11	5	991	4.46

⑨	308	394	235	37	16	990	3.95
⑩	456	300	196	23	15	990	4.17
⑪	424	325	205	20	14	988	4.14

表2. 平成27年度後期の回答の集計

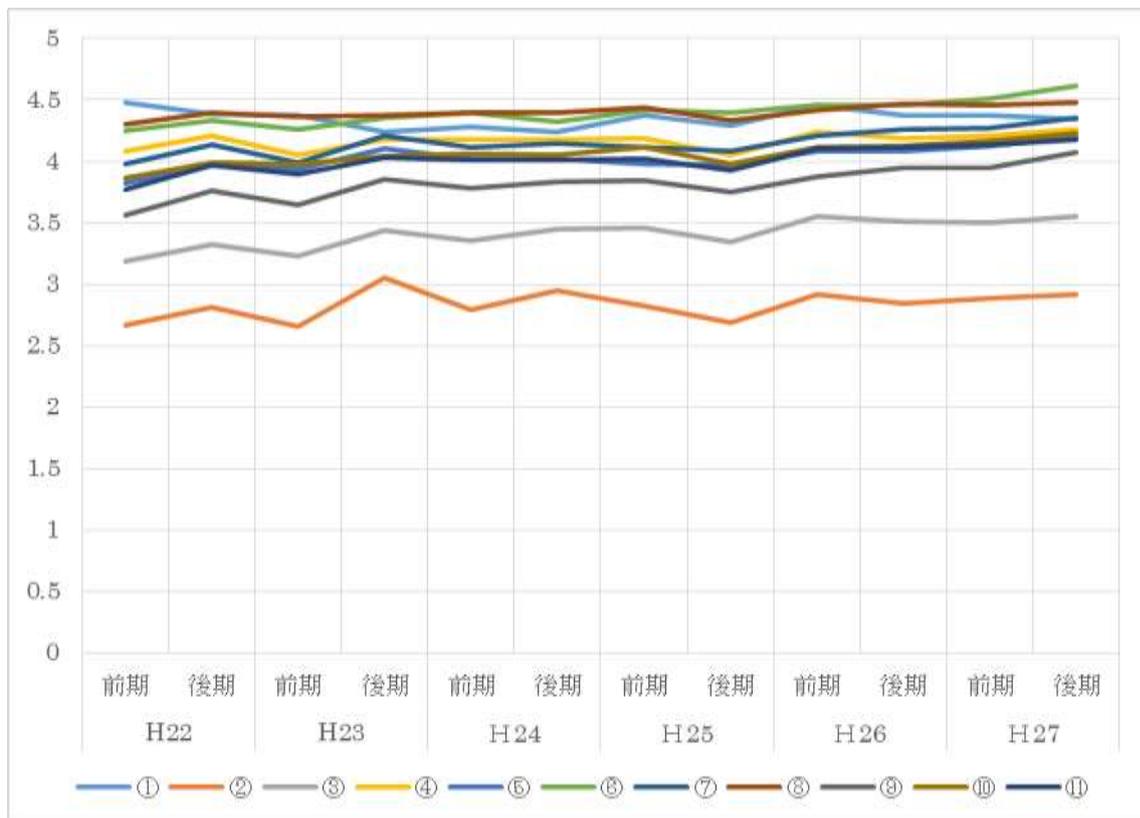
設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値
	5	4	3	2	1		
①	378	158	107	18	4	665	4.34
②	73	112	282	76	119	662	2.92
③	142	193	245	49	32	661	3.55
④	330	214	89	29	3	665	4.26
⑤	331	192	93	30	15	661	4.20
⑥	468	141	48	6	1	664	4.61
⑦	362	196	87	17	3	665	4.35
⑧	408	179	64	10	2	663	4.48
⑨	231	278	133	16	7	665	4.07
⑩	292	254	102	11	6	665	4.23
⑪	277	258	108	15	7	665	4.18

表3. 過去6年間のアンケート調査による各設問の平均値

設問		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
H22	前期	4.48	2.67	3.19	4.08	3.82	4.25	3.98	4.30	3.56	3.86	3.77
	後期	4.38	2.81	3.32	4.21	3.97	4.33	4.14	4.40	3.76	3.99	3.97
H23	前期	4.37	2.66	3.23	4.05	3.94	4.26	3.99	4.36	3.65	3.98	3.90
	後期	4.24	3.05	3.44	4.18	4.10	4.35	4.21	4.37	3.85	4.04	4.03
H24	前期	4.28	2.79	3.35	4.18	4.02	4.40	4.11	4.40	3.78	4.06	4.01
	後期	4.24	2.95	3.45	4.18	4.02	4.32	4.15	4.40	3.83	4.05	4.01
H25	前期	4.37	2.82	3.46	4.19	3.98	4.42	4.11	4.44	3.84	4.11	4.02
	後期	4.29	2.69	3.34	4.05	3.97	4.40	4.08	4.33	3.75	3.98	3.93
H26	前期	4.46	2.92	3.55	4.24	4.08	4.46	4.21	4.42	3.88	4.11	4.10

	後期	4.37	2.85	3.51	4.19	4.08	4.46	4.26	4.47	3.95	4.13	4.11
H27	前期	4.37	2.89	3.50	4.21	4.12	4.51	4.27	4.46	3.95	4.17	4.14
	後期	4.34	2.92	3.55	4.26	4.20	4.61	4.35	4.48	4.07	4.23	4.18
平均値		4.35	2.84	3.41	4.17	4.03	4.40	4.16	4.40	3.82	4.06	4.01

図 1. 過去 6 年間のアンケート調査による各設問の平均値 (表 3 のデータをグラフ化)



1) 全体について

昨年度と本年度を比較すると、前期の設問①、後期の設問①②③④の 5 項目のポイントに 0.09 ポイントの範囲内で下降が見られるが、他設問の 18 項目については 0.12 ポイントの範囲内で上昇している。年度によって、アンケート調査には増減があるものの、全体を通じては、若干ではあるが上昇しているように見える。

このアンケートを開始した平成 22 年度からのデータの平均値と、今年度の前期後期の各平均値と比較した結果、後期の設問①が 0.01 ポイント平均値よりも下回っているが、他はすべて上昇していることから、長年の授業改善は一定の効果を産み出していると考えられる。

今後も、講義・実習・演習等の教育を実施する教員としては、これまでの各自で記載した授業改善報告書を踏まえ、授業改善に取り組むたい。

2) 各設問について

[学生の授業取り組みに関する質問]

設問①：前期後期ともに、平均値は 4 点台であるが、よく出席したとは考えていない。回答「1、

2、3」の学生が2割弱存在することに注視し、学生の取り組み姿勢の改善を図り、今後はこの値を下げるような取り組みが望まれる。この設問は例年高いポイントとなっており、学生の「自分に甘い」気質がうかがえる。

設問②：他の設問と比べ、依然ポイントが低い。少人数でのゼミとは違い、受講生多数の講義では、「質問や発言しにくい」「時間がない」などもその要因として考えられる。講義終了後に質問される場合も多くみられることから、講義終了後の質問についても設問に記載しても良いと考える。

設問③：後期はこれまでの各期の結果の中では最も高かった3.55ポイントと同値であったが、前期は昨年度と比較してポイント減となっている。各期とも設問②に次いで低評価であり、回答「3」の「どちらともいえない」を含めると約半数前後の学生が積極的に取り組んでいないと回答している。各科目の位置づけを第1回目の授業や分野ならびに専攻説明会などを通じて明確にし、特色に合わせて自発的な参加意欲を高めるような具体的方策が望まれる。

〔教員の授業実施方法に関する質問〕

設問④：後期は過去最高の4.26ポイントと最高評価であった。そして前期後期とも、教員の声が聞き取り難いとの低評価の回答「1、2」は、1割を大きく下回る結果となった。これは長年の取り組みにより、マイクの使用や教室の変更などの各教員の対応により改善が図られたものと考えられる。今後も各授業において、学生に声が聞こえているかを確認することにより、より改善がなされるものと考ええる。

設問⑤：前期後期ともに過去最高の4.12、4.20ポイントと最高評価であった。ただ前期後期ともに、1割弱が回答「1、2」と教員の板書等は見づらいとある。今後も、さらなるプレゼンテーション方法や質の工夫など、各教員の対応で改善が必要と考える。

設問⑥：前期後期ともに過去最高の4.51、4.61ポイントと最高評価であった。授業時間については、比較的厳守されていると判断でき、今後もさらなる継続が望まれる。

設問⑦：前期後期ともに過去最高の4.27、4.35ポイントと最高評価であった。不満を抱いている学生は少なく、概ね良好であると考えられる。現在の状況を維持しつつも、授業中、学生に意見を聞いたり、問いかけをしたりするなど学生の理解度や意見を吸い上げる工夫が望まれる。

設問⑧：昨年度後期の4.47ポイントの過去最高を継承するように、今年度前期4.46ポイント、後期4.48ポイントの高評価であり、各教員が熱意を持って授業に取り組んでいると判断される。今後もさらなる継続が望まれる。

〔総合評価〕

設問⑨：前期は過去最高の3.95ポイントと並び、後期は4.07ポイントと過去最高を更新した。内容は、授業を非常によく理解できたとする回答「5」は全体の3割強であり、回答「4」の多少理解できたと回答している4割前後の学生よりも少ない現状にあった。多くの学生が自信をもってよく理解できたとは言えない状況にあった。設問②および③の結果と合わせ考えると、学生の取り組み姿勢といった根本的な課題とも考えられる。今後の継続的な分析と取り組みが望まれる。

設問⑩：前期後期ともに過去最高の4.17、4.23ポイントであった。ただし回答「1、2、3」までを含めると、まだ2割前後の学生に将来役に立つと認識されていない。設問⑨と同様に学生の取り組み姿勢についての課題もあると思われるが、科目の意義や位置づけ、特色の理解を深めること、将来における職業意識などが改善に結びつくと思われる。

設問⑩：前期後期ともに過去最高の 4.14、4.18 ポイントであった。回答「5」と特に満足感を得られていると回答した学生の割合は 4 割強であり、「4、5」を含めると 8 割前後と概ね良好と考える。しかし反面、2 割前後の学生は回答「1、2、3」と満足であったとは答えていない。この評価は他の全設問を通した総合的な評価であり、多くの学生において絶対的な満足感が得られているわけではない。これまでの授業評価結果をもとに各教員は各設問項目を中心に改善を図っているが、学生自信の授業に対する積極的な取組み（設問③）や理解度を向上させる（設問④）とともに総合評価の改善に結びつくと考えられる。各教員および学科の地道な改善努力の継続が重要であると考えられる。

(2) 管理栄養学科

平成 27 年度前期 授業評価アンケート 集計結果分析

管理栄養学科については、昨年の授業評価アンケートの結果と比較しながら、反省点を分析した。

(アンケート集計結果(平均値):()内は平成 26 年度前期結果)

設問 1) 私はこの授業によく出席した 4.84(4.86)

設問 2) 私は授業内容について質問や発言をした 3.07(3.10)

設問 3) 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした) 3.69(3.81)

設問 4) 教員の声は聞き取りやすかった 4.36(4.44)

設問 5) 教員の板書(又は PPT・配布資料等)は読みやすかった(見やすかった)
4.29(4.35)

設問 6) 教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた 4.64(4.73)

設問 7) 教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた 4.39(4.42)

設問 8) 教員は熱意を持って授業をしていた 4.54(4.60)

設問 9) 私はこの授業内容を理解できた 4.04(4.19)

設問 10) 私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役立つと感じた
4.63(4.69)

設問 11) 私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた 4.27(4.41)

- ・ 管理栄養学科では前期においては平成 25 年度から今年度(平成 27 年度)まで、設問 2)、設問 3)の項目を除いてすべての項目で 4.00 ポイント以上という評価が得られている。今回のアンケートの平均値としては、前回のアンケート集計結果(平成 26 年度前期)と比較して、 $-0.02 \sim -0.15$ ポイントの範囲でわずかながら、平均値がすべての項目で低下した。平成 25 年度前期と比較すると、同様の範囲内で数値が上回っている項目もあることから、毎年ほぼ同じような評価が得られているととらえてよいと考える。この結果を毎年維持していくための教員による授業に対する熱心な取り組みが伺える。

- ・ 今回特に低下がみられた(−0.1〜−0.15 ポイント低下)項目は、設問 3)、設問 9)、設問 11)であった。学生の積極性が若干下がった(設問 3)ことによる授業内容への理解度が下がり(設問 9)、これに連動して総合的な満足度が下がった(設問 11)と考えられる。わずかな低下とはいえ、この結果を踏まえ、各教員が学生の授業への積極的な参加を促すための工夫をしていく必要がある。このことは、設問 2)の授業内容についての質問や発言のポイントの上昇にもつながると考えられる。特に座学での授業でいかに質問や発言といった積極性を向上させるかという点については、学科内でも授業の取り組みの事例などを共有したり、あるいは学生の意見等も取り入れていく必要があるのではないかと考える。

・ 学科全体で反省点をまとめるとほぼ毎年同じような推移で良好な結果が得られており、授業評価アンケートの結果が授業に生かされていると思われるが、評価値のわずかな低下がみられたことに対しては、本学科教員一人ひとりが自分自身の科目での結果を振り返り、反省点をしっかり意識した授業を行うことが大変重要である。とくに設問2)3)の学生の積極性に関する点数が他より低いため、授業への工夫あるいは環境づくり等の対策が必要であると考えられる。

平成 27 年度後期 授業評価アンケート 集計結果分析

管理栄養学科については、昨年の授業評価アンケートの結果と比較しながら、反省点を分析した。

(アンケート集計結果(平均値):()内は平成 26 年度後期結果)

設問 1)私はこの授業によく出席した 4.83(4.89)

設問 2)私は授業内容について質問や発言をした 3.08(3.24)

設問 3)私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした) 3.60(3.76)

設問 4)教員の声は聞き取りやすかった 4.47(4.54)

設問 5)教員の板書(または PPT・配布資料等)は読みやすかった(見やすかった)
4.40(4.43)

設問 6)教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた 4.82(4.69)

設問 7)教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた 4.44(4.53)

設問 8)教員は熱意を持って授業をしていた 4.59(4.62)

設問 9)私はこの授業内容を理解できた 4.10(4.19)

設問 10)私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役立つと感じた
4.70(4.68)

設問 11)私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた 4.42(4.45)

- ・ 管理栄養学科では後期においても平成 25 年度から今年度(平成 27 年度)まで、設問 2)、設問 3)の項目を除いてすべての項目で 4.00 ポイント以上という評価が得られている。今回

のアンケートの平均値としては、前回のアンケート集計結果(平成 26 年度後期)と比較して、設問 6)で 0.13 ポイント、設問 10)で 0.02 ポイント上昇し、平成 25 年度に続き、さらに上昇した。その他の設問項目では、 -0.03 ～ -0.16 ポイントの範囲でわずかながら、平均値が低下した。平成 25 年度後期と比較すると、設問 1)で同ポイントであった以外はすべての項目でポイントが上回っていることから、前期同様、後期においても毎年ほぼ同様な評価が得られているととらえてよいと考える。この結果を毎年維持していくための教員による授業に対する熱心な取り組みが伺える。

- ・ 今回特に低下がみられた(-0.16 ポイント低下)項目は、設問 2)、設問 3)であった。設問 3)に関しては後期でも同様の結果であった。平成 25 年度と比較するとこれらの設問項目ではポイントが上回っていることから、この設問項目に関しては、アンケートを実施した学年(学生)にも影響を受けることが考えられる。今後のアンケート結果も参考にしていきたいところである。しかしながら、他の項目と比較すると、設問 2)3)では平均値が 3.0 ポイント台と低い傾向にあるため、何らかの改善が必要であると考ええる。
- ・ 設問 6)については 0.13 ポイントの上昇が認められ、平成 25 年度に続き、さらに上昇がみられた。時間の厳守に関しては、アンケート結果を踏まえ、教員一人ひとりが、時間を意識して授業を進めた結果であると考ええる。
- ・ 設問 10)については 0.02 ポイントの上昇が認められ、平成 25 年度に続き、さらに上昇がみられた。管理栄養士養成である本学科における授業が学生にとって、「なんらかのかたちで将来役立つと感じられている」ことは十分な授業が行われており、満足度も高いと状況となっていることが伺える。
- ・ 学科全体で反省点をまとめると後期においてもほぼ毎年同様な推移で良好な結果が得られており、授業評価アンケートの結果が授業に活かされていると思われるが、評価値のわずかな低下がみられた項目に対しては、本学科教員一人ひとりが自分自身の科目での結果を振り返り、反省点をしっかり意識した授業を行うことが大変重要である。とくに設問 2)3)の学生の積極性に関する点数が他より低いため、授業への工夫あるいは環境づくり等の対策が必要であると考えられる。次年度に向けて、この 2 項目の改善に取り組むことで、他の設問項目もさらに向上できるのではないかと考えられる。

(3) 食品開発科学科

平成 27 年度前期 授業評価アンケート 集計結果分析

1. 平成 27 年度前期 授業評価アンケート実施科目

教員名	科目名	学年	回答者数
柏田雅徳	醸造学	2	9
山下 博	フードビジネス論	3	11
工藤哲三	食品開発科学概論	1	29
寺原典彦	食品基礎実験	1	37
外山英男	生物学Ⅰ	1	105
紺谷靖英	微生物学	1	40
中瀬昌之	農産物利用学	3	34
		合計	265

(参考)平成 26 年度前期 授業評価アンケート実施科目

教員名	科目名	学年	回答者数
柏田雅徳	醸造学	2	30
寺原典彦	食品学Ⅰ	2	33
中瀬昌之	食品科学概論	1	19
金松澄雄	食糧生化学	2	10
紺谷靖英	代謝生化学	2	22
外山英男	食品保蔵学	3	18
山田光子	薬理学	3	24
		合計	156

2. 平成 27 年度前期 アンケート結果

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値
	5	4	3	2	1		
①	231	40	16	4	0	291	4.41
②	41	45	111	47	46	290	2.96 (無効回答1)
③	49	83	119	36	3	290	3.48 (未回答1)
④	112	100	56	17	5	290	4.02 (未回答1)
⑤	114	86	63	19	8	290	3.96 (無効回答1)
⑥	197	68	21	1	4	291	4.56
⑦	124	76	56	23	12	291	3.95
⑧	127	89	55	14	5	290	4.10 (未回答1)
⑨	68	100	86	29	8	291	3.66
⑩	89	109	71	17	5	291	3.89
⑪	88	93	77	22	11	291	3.77

(参考)平成 26 年度前期 アンケート結果

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値
	5	4	3	2	1		
①	90	43	15	7	0	155	4.39
②	6	20	93	22	14	155	2.88
③	14	42	77	20	2	155	3.30
④	68	70	16	1	0	155	4.32
⑤	59	62	31	3	0	155	4.14
⑥	92	50	12	0	0	154	4.52
⑦	71	66	16	2	0	155	4.33

⑥のみ未回答 2
その他は未回答 1

⑧	82	60	12	1	0	155	4.44
⑨	29	71	49	4	2	155	3.78
⑩	57	59	35	4	0	155	4.09
⑪	49	66	36	3	1	155	4.03

各学期のアンケート結果

設問 1. 私はこの授業によく出席した。

平均値 4.41 で前年より向上し、回答番号 3 以下の割合が前年より減少した。しかし、引き続き学科教員間で学生の出欠状況の情報共有を行い、早い段階で怠学者の抽出を行い、指導教員を中心に対応していく。

設問 2. 私は授業内容について質問や発言をした。

平均値 2.96 で、前年より向上が見られた。各教員が質問可能な時間帯を設けたり、学生が自主的に質問しやすい雰囲気作りをしたりするなど双方向性の授業形態に向けて更なる努力が必要のようである。

設問 3. 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした)。

平均値が 3.48 で前年より向上した。しかし、回答番号 3 以下が多数いることに対しては新たな対策を講じるべきである。また、大半の学生にさらに自学自習の習慣を定着させる必要がある。

設問 4・5・6・7・8 は教員の授業実施方法に関する質問である。

平均値が 3.95－4.56 と前年並みであった。概ね良好であり、同一科目が対象ではないが、従来の平均値をほぼ維持している。設問 5「教員の板書は見やすかった」に関しては、前回より若干低下していた(3.96)。

設問 9. 私はこの授業内容を理解できた。

平均値が 3.66 と十分とは言えない結果であった。また、回答番号 3 以下の回答がかなり多く、学生の理解度を増すための教員側の更なる努力の継続が必要である。

設問 10. 将来役に立つと感じた。

平均値 3.89 となり前年より低下した。この結果を真摯に受け止めて、学生の立場から見て、学科で設定している科目群及び授業内容の更なる改善を継続していくことが必要である。

設問 11. 満足度

平均値が 3.77 で前年より低下した。これについても、学生の立場から見て、学科で設定している科目群及び授業内容の改善を真摯に継続していくことが必要である。

平成 27 年度後期 授業評価アンケート 集計結果分析

1. 平成 27 年度後期 授業評価アンケート実施科目

教員名	科目名	学年	回答者数
紺谷靖英	栄養学Ⅱ	3	35
中瀬昌之	食品学Ⅱ	2	13
寺原典彦	食品分析学	1	28
柏田雅徳	発酵食品学	1	37
山下 博	食品流通・消費論	2	13
外山英男	フードスペシャリスト論	1	33
黒木英浩	食品企業論	3	29
合計			186

平成 26 年度後期 授業評価アンケート実施科目

教員名	科目名	学年	回答者数
紺谷靖英	栄養学Ⅱ	3	35
中瀬昌之	食品学Ⅱ	2	33
寺原典彦	食品機能学	2	31
柏田雅徳	食品製造学	2	30
金松澄雄	生物化学Ⅱ	1	20
外山英男	生物学Ⅱ	1	16
山田光子	生理学	1	18
合計			183

2. 平成 27 年度後期 アンケート結果

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値
	5	4	3	2	1		
①	119	50	17	2	0	188	4.52
②	22	40	76	23	27	188	3.04
③	29	62	73	19	5	188	3.48
④	82	59	37	7	3	188	4.12
⑤	79	57	36	11	5	188	4.03
⑥	120	45	21	2	0	188	4.51
⑦	81	57	39	6	5	188	4.08
⑧	102	51	29	4	2	188	4.31
⑨	43	86	43	8	8	188	3.79
⑩	74	67	37	5	5	188	4.06
⑪	60	73	43	5	7	188	3.93

(参考)平成 26 年度後期 アンケート結果

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値
	5	4	3	2	1		
①	129	34	16	3	0	183	4.56
②	14	39	84	28	17	183	3.01
③	26	62	69	21	4	183	3.45
④	86	62	27	5	2	183	4.21
⑤	70	66	35	8	3	183	4.03
⑥	120	49	13	0	0	183	4.56
⑦	94	59	26	3	0	183	4.32
⑧	102	63	16	1	0	183	4.44
⑨	42	80	54	4	2	1	3.84

①～⑪まで
未回答 1

⑩	64	79	35	4	0	183	4.09
⑪	61	76	42	0	3	183	4.03

各学期のアンケート結果

設問 1. 私はこの授業によく出席した。

平均値 4.52 で前年とほぼ同様で良好である。一方、回答番号 3 以下の割合が約 10% 存在する。引き続き学科教員間で学生の出欠状況の情報共有を行い、早い段階で怠学者の抽出を行い、指導教員を中心とした対応を継続していく必要がある。

設問 2. 私は授業内容について質問や発言をした。

平均値 3.04 で、これまでの授業評価アンケートの結果と同様に、設問中最も低い。各教員が質問可能な時間帯を設けたり、学生が自主的に質問しやすい雰囲気作りをしたりするなど双方向性の授業形態に向けてさらなる改善・工夫を継続していく必要がある。

設問 3. 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした)。

平均値が 3.48 で前年とほぼ同様であった。また、回答番号 2 以下の割合がかなり多く、学生に自学自習の習慣を身に付けさせるための更なる改善を継続することが必要である。

設問 4・5・6・7・8 は教員の授業実施方法に関する質問である。

平均値が 4.03－4.51 と概ね良好であり、同一科目が対象ではないが、これまでの傾向とほぼ同様である。しかし、この方面においても改善を継続していくのは当然のことと思われる。学年による学生の気質の変化も考慮していく必要がある。

設問 9. 私はこの授業内容を理解できた。

平均値が 3.79 となり、低かった前年よりさらに低下した。回答番号 3 以下の回答が 3 割を超え、授業科目によっては学生にとって理解が困難であることがうかがえる。よって、学生の理解度を増すための教員側の努力と工夫を継続していくことが必要である。

設問 10. 将来役に立つと感じた。

平均値 4.06 であり、これもまた前年より低下した。学生の立場から見て、学科で設定している科目群及び授業内容をさらに改善していく必要性を教員側も真剣に認識する必要性が感じられた。

設問 11. 満足度

平均値が 3.93 で、これもまた前年より低下した。この結果は、授業の早急な改善が必要であることを意味している。さらに、3 を回答した学生もかなりいるので、学生の立場から見て授業満足度が上がるように更なる努力と工夫を継続することが必要である。1 と回答した学生が 7 人もいるが、この点については、今後詳しく調査する必要がある。授業改善のヒントが隠されているように思われる。

(4) 子ども教育学科

(1) 学生授業評価アンケート実施と授業改善の取り組み

□アンケート集計結果

【前期：実施教員16名 回答数700名】（授業ごとの複数回答）

【後期：実施教員16名 回答数721名】（授業ごとの複数回答）

表1 全項目（①～⑪）平均値の年度別・前後期データ

（数字は、回答の平均値）

設問 番号	質 問 内 容	2015 前期	2015 後期	2014 前期	2014後 期
学生の授業取り組みに関する質問					
①	私はこの授業によく出席した	4.68	4.66	4.66	4.61
②	私は授業内容について質問や発言をした	3.18	2.98	3.27	3.17
③	私はこの科目に積極的に取り組んだ（予習や復習をした）	3.69	3.57	3.80	3.72
教員の授業実施方法に関する質問					
④	教員の声は聞き取りやすかった	4.23	4.00	4.30	4.32
⑤	教員の板書(またはPPT・配布資料等)は読みやすかった(見やすかった)	4.13	3.99	4.16	4.21
⑥	教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた	4.56	4.44	4.67	4.54
⑦	教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた	4.24	4.13	4.31	4.30
⑧	教員は熱意を持って授業をしていた	4.53	4.35	4.63	4.54
総合的評価					
⑨	私はこの授業内容を理解できた	4.18	3.98	4.12	4.08
⑩	私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役に立つと感じた	4.43	4.26	4.42	4.37
⑪	私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた	4.29	4.09	4.31	4.22

表2 各項目の「特にそう思う」「多少そう思う」の占める割合 (%)

(小数点以下は四捨五入により算出)

設問 番号	質 問 内 容	2014 前期	2014 後期	2013前 期	2013 後期
学生の授業取り組みに関する質問					
①	私はこの授業によく出席した	95	93	93	91
②	私は授業内容について質問や発言をした	36	33	39	34
③	私はこの科目に積極的に取り組んだ (予習や復習をした)	58	55	61	58
教員の授業実施方法に関する質問					
④	教員の声は聞き取りやすかった	80	77	80	84
⑤	教員の板書 (または PPT・配布資料等) は読みやすかった (見やすかった)	48	70	75	78
⑥	教員は授業の開始・終了の時刻を守ろう としていた	90	85	94	89
⑦	教員は学生の反応を確かめながら授業を 進めていた	66	70	81	82
⑧	教員は熱意を持って授業をしていた	91	83	93	90
総合的評価					
⑨	私はこの授業内容を理解できた	82	71	76	78
⑩	私はこの授業で学んだ内容はなんらかの かたちで将来役に立つと感じた	87	81	86	85
⑪	私は総合的に判断してこの授業で満足が 得られた	83	76	83	81

□アンケート結果の分析

【全体的分析】

表1に示すように、今年度における学科教員の平均値が4ポイント以上の項目は、全11項目中、前期で9項目、後期は7項目あり、全体としての授業評価は、良好ととらえてよいように思われるが、前年度と比較すると後期では2項目減少している。

次に、表2に示す「特にそう思う」、「多少そう思う」の占める割合についてみてみると、80%台以上の項目は、前期で7項目、後期は4項目あり、同様に良好ととらえることもできるが、前年度と比較すると後期では3項目も減少している。

以上のように、表1及び表2の結果を前年度と比較すると、教員に対する授業評価は一見高いように思われるが、前年度に比べて相対的に低くなっている。前年度の反省事項を受けて、教員各自が授業改善に当たってきた成果が示されていない結果ともいえる。

また、各項目の中でも「学生の授業取り組みに関する質問」である、項目②「質問や発言」及び項目③「予習や復習」は、前年度に比べ表1、表2ともに平均値や割合が低くなっており、他項目に比べると極端に低く満足いくものではない。

このため、我が国が進める大学教育の改革の一つとして、教育方法の質的転換でもある「アクティブ・ラーニング」（学生の能動的な活動を取り入れた授業や学習方法）の実施が提起されているように、今後は学生と教員が双方向に向き合い、かつ学生が能動的に参加し、参加したくなる授業展開の在り方を工夫していく必要があるように思われる。

以下は、昨年度と本年度における、前期、後期それぞれについての概括的な分析である。

【前期について】

○表1から見えてくること

前年度前期と比較して、全11項目の平均値が高くなっているのは3項目で、8項目が低くなっており、次年度以降における授業改善の必要性が課題といえる。

○表2から見えてくること

前年度前期と比較して、全11項目の割合が高くなった項目は3項目で、8項目が低くなっており、15%以上低くなった項目も2項目あった。一番低くなった項目は⑤「教員の板書」で、27%も低くなっている。これも、表1と同様に、今後の授業改善の必要性が課題といえる。

【後期について】

○表1から見えてくること

前年度後期と比較して、平均値が高くなったのは1項目であり、他の10項目は低い結果となった。一番低くなった項目は④「教員の声の聞き取りやすさ」であり、0.32ポイントも減少している。次年度以降における授業改善の必要性が課題といえる。

○表2から見えてくること

前年度後期と比較して、全11項目の割合が高くなった項目は1項目で、10項目が低くなっており、5%以上低くなった項目も6項目あった。一番低くなった項目は⑦「教員の学生への反応の確かめ」で、12%も低くなっている。これも、表1と同様に、今後の授業改善の必要性が課題といえる。

(5) 教養・教職センター

授業評価アンケートの 11 設問は 3 つの分野に分れている。設問 1 から 3 は「学生の授業取り組みに関する質問」、4 から 8 は「教員の授業実施方法に関する質問」、9 から 11 は「総合的評価」の構成になっている。

設問

番号、略語、文章

番	略	文
1	出席	私はこの授業によく出席した
2	発言	私は授業内容について質問や発言した
3	取組	私はこの科目に積極的に取り組んだ（予習と復習した）
4	聞取	教員の声は聞き取りやすかった。
5	資料	教員の板書（または PPT・配布資料など）は読みやすかった（見やすかった）
6	時刻	教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた
7	反応	教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた
8	熱意	教員は熱意を持って授業をしていた
9	理解	私はこの授業内容を理解できた
10	役立	私はこの授業で学んだ内容はなんらかの形で将来的に役立つと感じた
11	満足	私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた

回答

結果を考えたり、視覚化(data visualization)にしたりするため平均だけではなくて、中立的(neutral)な評価を捨てて、肯定的(positive)と否定的(negative)な回答に注目した。にした。自分と関連性がないか何かの理由でアンケートの質問を考えたくない人には「どちらともいえない」ような「3」の選択幅が思いやりがいい。ただ、ある程度「思う」か「思わない」か決められない人が多いだと反応している人が見えにくくなる恐れがある。

番号と意味

番号	意味
5	特にそう思う
4	多少そう思う

番号	意味
3	どちらともいえない
2	あまりそう思わない
1	全くそう思わない

アンケートの人数と実施

今年の前期と後期の平均人数の差が、去年と比べると、大きい。

教員人数と回収枚数

	先生	生徒	平均
H27 前期	4	248	62
H27 後期	7	231	33
H26 前期	9	450	50
H26 後期	6	335	55

アンケート実施の講義、人数

H27 前期の教員と講義

教員	科目	計
長谷川二郎	生物学の基礎	121
西村盛正	体育実技	22
スモール, ブライアン	英語コミュニケーション I	81
波津久義勝	中等教科教育法・農業	24

H27 後期の教員と講義

教員	科目	計
植村秀人	教育社会学	19
長谷川二郎	生物の世界	66

教員	科目	計
スモール, ブライアン	英語コミュニケーションⅡ	30
波津久義勝	中等教科教育法・農業	22
章大寧	環境問題入門	2
西村盛正	生涯スポーツ	34
長友泰潤	哲学	58

「学生の授業取り組みに関する質問」は学生の「出席」(1)と「発言」(2)、「取組」(3)について、教員一人一人の問題より、講義人数と学校教育、アテンション・エコノミーの課題になりそう。人数が多くなると学生の「発言」が難しくなる。アルバイトやインターネットなど大学の勉強以外の時間的な要求が多いのが課題だ。情報が安いと注意が高い("When information is cheap, attention is expensive" James Gleick). 専門科目と違って資格・試験の動機・目的意識が薄い教養科目にとって、それ以外の動機を理解できるように努めるべき。説得者(Persuader)にとって情報の利便と容量より、自分自身の価値観と関連性のほうが大事だと気付く必要だ。教養科目がその意識を高めるのに役立つ。メディア・リテラシーと結びつけるといいはず。

「教員授業実施方法に関する質問」は一番 FD(教員開発・成長)に関連性(Relevance)がありそう。評価が高いよう。平均人数が 64 人の前期の講義でも「資料, プレゼン, 板書」関連の質問結果が一番低くて平均 3.93、肯定的な(5 と 4 の)評価は 67%と否定的な(1 と 2 の)評価は 30%で、平均人数の 33 人の後期の講義になると「資料, 板書」(5)がまだ一番低い平均結果は 4.11 と肯定的(positive)な回答は 73.5%に上がった。まだ否定的(negative)な回答は四分の一以上 26.1%だけど、学生自身の取組(2)「発言」と(3)「積極」さほど悪い結果ではない。授業実施は大事だが、社会的な価値観とメディア環境が作る文化的な背景が作り出す状況が課題になりそう。

「総合的評価」は高い。やっぱり、後期に平均人数は 33 人になると「役立つ」評価が落ちて「理解」度が上る。「満足」と肯定的に判断した学生が 76%になっても、積極的に「取組」んだと思わない(2 と 1 を回答した)学生が 36%に留まる。学生 10%ぐらい、時間的な要求が軽いと満足する、価値よりコンビニエンスを高く評価する現代社会現象が興味深い課題になりそう。

アンケート結果

平成 27 年前期

番	略語	肯%	否%	平均	#5	#4	#3	#2	#1	#無
---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

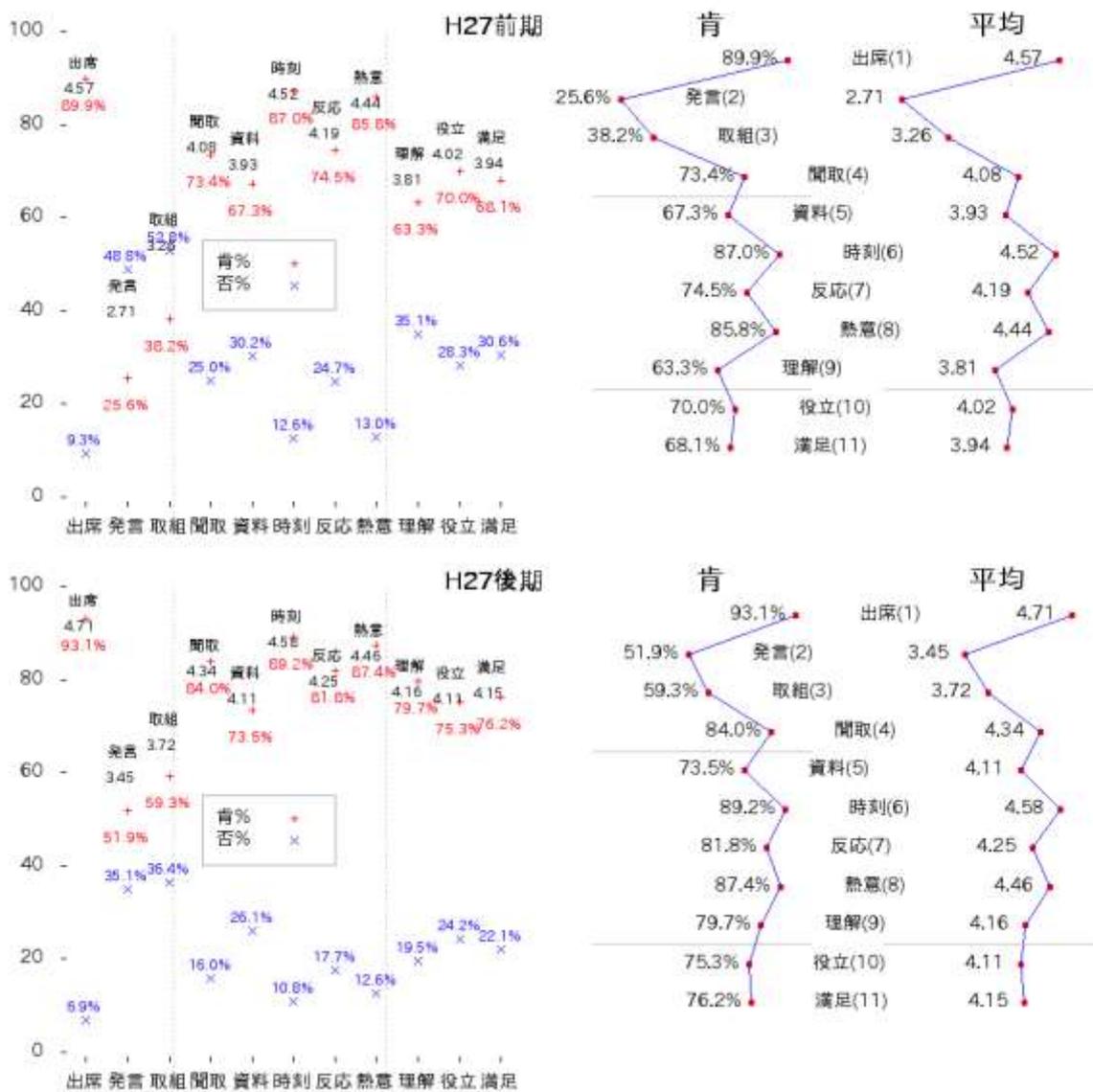
番	略語	肯%	否%	平均	#5	#4	#3	#2	#1	#無
1	出席	89.9	9.3	4.57	174	49	19	4	2	0
2	発言	25.6	48.8	2.71	23	40	89	31	63	2
3	取組	38.2	52.8	3.26	46	48	97	33	22	2
4	聞取	73.4	25.0	4.08	113	69	42	20	4	0
5	資料	67.3	30.2	3.93	94	73	56	19	6	0
6	時刻	87.0	12.6	4.52	165	49	27	4	1	2
7	反応	74.5	24.7	4.19	121	63	53	8	2	1
8	熱意	85.8	13.0	4.44	152	59	30	2	3	2
9	理解	63.3	35.1	3.81	72	85	66	21	4	0
10	役立	70.0	28.3	4.02	97	76	61	9	4	1
11	満足	68.1	30.6	3.94	82	87	65	11	3	0

平成 27 年後期

番号	略語	肯%	否%	平	#5	#4	#3	#2	#1	#無
1	出席	93.1	6.90	4.71	180	35	15	1	0	0
2	発言	51.9	35.1	3.45	61	59	65	16	30	0
3	取組	59.3	36.4	3.72	65	72	69	15	10	0
4	聞取	84.0	16.0	4.34	125	69	28	9	0	0
5	資料	73.5	26.1	4.11	99	70	50	10	1	1
6	時刻	89.2	10.8	4.58	160	46	24	1	0	0
7	反応	81.8	17.7	4.25	109	80	34	7	1	0
8	熱意	87.4	12.6	4.46	139	63	26	3	0	0
9	理解	79.7	19.5	4.16	94	90	38	7	2	0
10	役立	75.3	24.2	4.11	95	79	46	10	1	0

番号	略語	肯%	否%	平	#5	#4	#3	#2	#1	#無
11	満足	76.2	22.1	4.15	102	74	47	4	4	0

Code



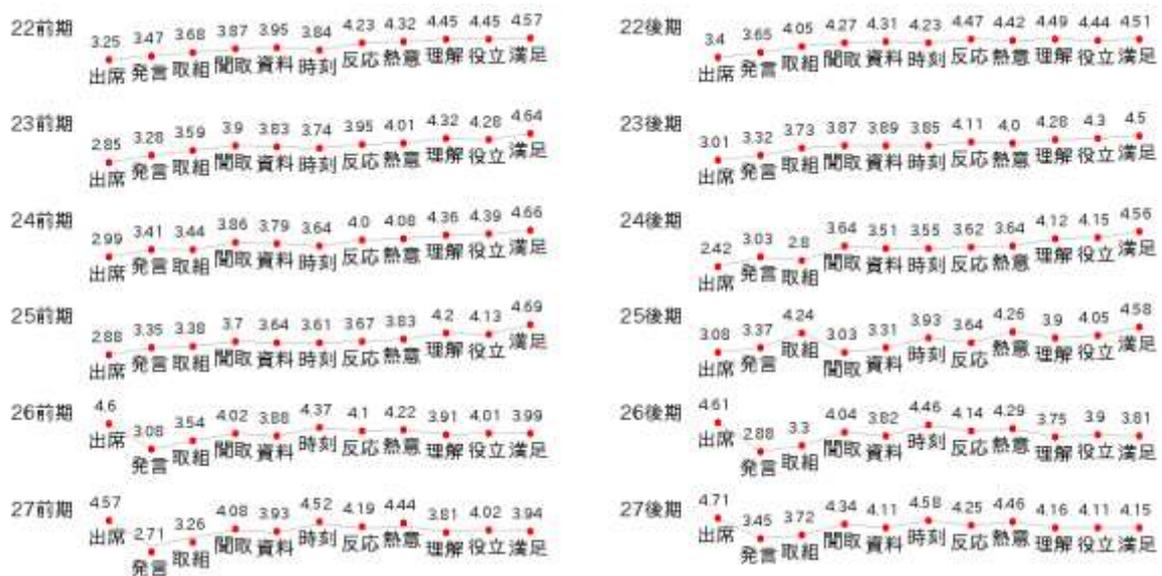
数年の平均結果表の平均結果

平成 22 年前期から 27 年後期までの平均結果表

22 前	後	23	後	24	後	25	後	26	後	27	後	略	番
3.25	3.40	2.85	3.01	2.99	2.42	2.88	3.08	4.60	4.61	4.57	4.71	出席	1
3.47	3.65	3.28	3.32	3.41	3.03	3.35	3.37	3.08	2.88	2.71	3.45	発言	2
3.68	4.05	3.59	3.73	3.44	2.80	3.38	4.24	3.54	3.30	3.26	3.72	取組	3
3.87	4.27	3.90	3.87	3.86	3.64	3.70	3.03	4.02	4.04	4.08	4.34	聞取	4

22 前	後	23	後	24	後	25	後	26	後	27	後	略	番
3.95	4.31	3.83	3.89	3.79	3.51	3.64	3.31	3.88	3.82	3.93	4.11	資料	5
3.84	4.23	3.74	3.85	3.64	3.55	3.61	3.93	4.37	4.46	4.52	4.58	時刻	6
4.23	4.47	3.95	4.11	4.00	3.62	3.67	3.64	4.10	4.14	4.19	4.25	反応	7
4.32	4.42	4.01	4.00	4.08	3.64	3.83	4.26	4.22	4.29	4.44	4.46	熱意	8
4.45	4.49	4.32	4.28	4.36	4.12	4.20	3.90	3.91	3.75	3.81	4.16	理解	9
4.45	4.44	4.28	4.30	4.39	4.15	4.13	4.05	4.01	3.90	4.02	4.11	役立	10
4.57	4.51	4.64	4.50	4.66	4.56	4.69	4.58	3.99	3.81	1.00	4.15	満足	11

平均結果図



27年の前期と後期の差に注目したい。平均値が大きく変わるのは設問
平均の差 H27 平均差の順

番	略	H26z	H26k	平均差	H27z	H27k	平均差	差の差
2	発言	3.25	2.88	0.37	2.71	3.45	0.74	0.37
3	取組	3.47	3.3	0.17	3.26	3.72	0.46	0.29

番 略	H26z	H26k	平均差	H27z	H27k	平均差	差の差
9 理解	3.84	3.75	0.09	3.81	4.16	0.35	0.26
4 聞取	4.23	4.04	0.19	4.08	4.34	0.26	0.07
11 満足	3.95	3.81	0.14	3.94	4.15	0.21	0.07
5 資料	3.68	3.82	0.14	3.93	4.11	0.18	0.04
1 出席	4.57	4.61	0.04	4.57	4.71	0.14	0.10
10 役立	3.87	3.9	0.03	4.02	4.11	0.09	0.06
7 反応	4.32	4.14	0.18	4.19	4.25	0.06	0.12
6 時刻	4.45	4.46	0.01	4.52	4.58	0.06	0.05
8 熱意	4.45	4.29	0.16	4.44	4.46	0.02	0.14



平成 27 学年の前期と後期の結果差に注目する。肯定か否定の意見のあった回答の割合も、大きく変わるのが「発言」(2)、「取組」(3)と「理解」(9)、プラス「聞取」(4)だ。

H27 肯否%の差、前期と後期の肯定差順

番	略	H27 肯定%差	否定差	肯%前	後期	否%前	後期
2	発言	26.3	13.7	25.6	51.9	48.8	35.1
3	取組	21.1	16.4	38.2	59.3	52.8	36.4
9	理解	16.4	15.6	63.3	79.7	35.1	19.5
4	聞取	10.6	9.0	73.4	84.0	25.0	16.0
11	満足	8.1	8.5	68.1	76.2	30.6	22.1
7	反応	7.3	7.0	74.5	81.8	24.7	17.7
5	資料	6.2	4.1	67.3	73.5	30.2	26.1
10	役立	5.3	4.1	70.0	75.3	28.3	24.2
1	出席	3.2	2.4	89.9	93.1	9.3	6.9
6	時刻	2.2	1.8	87.0	89.2	12.6	10.8
8	熱意	1.6	0.4	85.8	87.4	13.0	12.6

平成 27 学年と 26 年学年の結果差のトップスリーは前期と後期の結果差と同じだ。対話と創造ではなく試験と消費を中心とする学校教育の影響ではやっぱり自らの「発言」(2)と質問をするのが難しい。総合的判断での「理解」(9)と学生の関り方での積極的な「取組」(3)は順の入り変りけど数値が近くなっている。順の 4 番目から変化が激しい、「理解」(8)は順の 11 番から 4 番へ移した、学期の比較で順の 4 番の「聞取」(4)は学年の比較で 7 番に移した。

H27-26 肯否%の差,肯定差の差の順

番	略	H27-26 肯差	H27-26 否差	H27 肯定%差	否定差	H26 肯定%差	否定差
2	発言	16.5	22.1	26.3	26.3	9.8	4.2
9	理解	10.8	11.9	16.4	16.4	5.6	4.5
3	取組	9.7	9.0	21.1	21.1	11.4	12.1
8	熱意	6.5	5.7	1.6	1.6	8.1	7.3

番 略	H27-26 肯定差	H27-26 否定差	H27 肯定%差	否定差	H26 肯定%差	否定差
10 役立	4.9	4.6	5.3	5.3	0.4	0.7
1 出席	2.5	3.0	3.2	3.2	0.7	0.2
4 聞取	2.0	3.9	10.6	10.6	8.6	6.7
6 時刻	1.7	1.5	2.2	2.2	0.5	0.7
11 満足	1.1	2.7	8.1	8.1	7.0	5.4
7 反応	0.8	1.4	7.3	7.3	6.5	5.9
5 資料	0.6	0.2	6.2	6.2	6.8	6.4



アンケート結果は教養・教職センターのFD話し合いの土台作りに役立っている。そして、アンケート実施は数値の資格化(Data Visualization, see Edward *Tufte*'s /Beautiful Evidence/) のトレーニング(see Phillip *Janert*'s /GnuPlot in Action: Understanding Data with Graphs/ and *emacs org-mode* manuals). 教養・教職センターのアンケート実施は、毎回は教職員人と講義と学生の数が違うので年ごとと学期ごとの比較評価としてあまり参考にならないけど大きい流れが見えてくる。全大学でも同じように「質問や発言をした」について設問2の結果は低い方です。その結果を引き上げるとすればどんな工夫が効果的でありそうか話になる。今までの学校と大学、またはメディアと町(city)など社会的な教育効果の在り方についての話にも繋がる。従来の学校と大学では参加型学習体験、または社会と町に参加する機会は多くないようだ

アンケート結果は教養・教職センターのFD話し合いの土台作りに役立っている。そして、アンケート実施は数値の資格化(Data Visualization, see Edward **Tufte's** *Beautiful Evidence*) のトレーニング(see Phillip **Janert's** *GnuPlot in Action: Understanding Data with Graphs* and **emacs org-mode manuals**). 教養・教職センターのアンケート実施は、 毎回は教職員人と講義と学生の数が違うので年ごとと学期ごとの比較評価としてあまり参考にならないけど大きい流れが見えてくる。全大学でも同じように「質問や発言をした」について設問2の結果は低い方です。その結果を引き上げるとすればどんな工夫が効果的でありそうか話になる。今までの学校と大学、またはメディアと町(city)など社会的な教育効果の在り方についての話にも繋がる。従来の学校と大学では参加型学習体験、または社会と町に参加する機会は多くないようだ。

以前は講義の学生平均人数の評価の相関性を注目した。やっぱり人数が少ければ少ないほど学生は質問・発言しやすい、プレゼン・ホワイトボードが見やすい、と教員は理解の確認しやすいくて、満足感を得やすいだろう。以前は人数の少ないと教員の授業実施についての質問の平均結果が高いようだった。学生人数が増えると総合評価と学生自身に取組だけじゃなくて、授業実施についての結果が下るように見えた。

「学んだ内容はなんらかのかたちで将来役に立つと感じた」(10)の平均結果は低く見える学期も目立つ。大学教育の目的は資格と就職を得ることだけではなく、自由社会の自立した市民になるための意識を高めて、実感させることを検討するべき。「短期間で就職先を辞める卒業生が多い」ことも意識して広い意味で学生と社会のニーズに答えられるような講義の内容と在り方を考えたい。または教養・教職センターは大学の課題である「各学部の有機的つながりの欠如」にどんなふうに取り組みするか検討したい。

以前と続いて、アンケート結果を視覚的に示すことを、情報デザイン(**Edward Tufte**)の理念から教材作りの訓練として見ている。フリーソフトを使って簡単なプログラム(スクリプト)を組めると自由自在になる。毎年の反復開発(**Janert's** "iterative development")累積でより簡潔な図(グラフ)作れるようになる。フリーソフトの **emacs** (と **org-mode**) おかげで、学問で課題になる **Reproducible Research**(再現可能な研究)と **Literate Programming**(文芸的プログラミング)のトレーニングをしながら、クラシックなアプリケーションとパソコン言語(**emacs-*lisp***) の教育可能性を考える。「理解」するのに必要なことがあれば、何でもできるようになるとFD(教員開発・成長)になる。